View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Osaka City University Repository

氏　　名	**林　嵐娟**
学位の種類	博　　士（文　　学）
学位記番号	第 5122 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
学位論文名	**中日英〈ウナギ文〉の研究**
論文審査委員	主査教授 関　茂樹　　副査教授 衣笠忠司 副査教授 丹羽哲也

論文内容の要旨

本論文の目的は、Turner and Fauconnier（1995）やFauconnier and Turner（2002）などとは異なる観点から、次の問題を考察することである。著者たちが語る意味での「プロンプト」としての言語表現と、それに託された意味、あるいは、そこから理解すべき意味とはどのような関係にあるのか、また、聞き手は、どのように言語表現をプロンプトとして利用し、どのように意味構造を構築するのであろうか、といった問題である。具体的な考察対象として、中日英の〈ウナギ文〉を取り上げた。

第１章「〈ウナギ文〉の問題」では、まず〈ウナギ文〉を定義した上で、日本語の〈ウナギ文〉の分析は簡単にふれるにとどめ、これまであまり言及されることがなかった中国語と英語の〈ウナギ文〉の分析について取り上げた。

第２章「〈ウナギ文〉の統語的特徴」では、〈ウナギ文〉の統語的特徴について三つの節を設け、１節では中国語、２節では日本語、３節では英語を考察した。

第３章「〈ウナギ文〉の意味的特徴」では、通例のコピュラ文と比較しながら、〈ウナギ文〉の意味的特徴を記述した。

第４章「関係構築」は本論文の中核部分をなす。１－３章で得られた考察の結果を踏まえ、まず１節では、意味解釈における関係構築の重要性を再確認した。続く２節では、「話題が言語によって明示される場合」、「話題が言語によって明示されない場合」、さらに、「話題も文脈も言語によって明示されない場合」という三つのサブセクションに分けて、小説や映画の台本などから引用した〈ウナギ文〉の用例を分析しながら、関係構築のメカニズムを示した。〈ウナギ文〉の意味解釈における関係構築では、最低限三つの関係、すなわち、NP_1の指示対象と話題との関係、NP_2の指示対象と話題との関係、さらに、NP_1とNP_2の指示対象の関係を構築することが不可欠であることを論じた。３節では、意味解釈のプロセスを図式化し、関係構築のモデルの重要な一部をなす関係の構造体を提示した。

第５章「〈ウナギ文〉の解釈」では、〈ウナギ文〉の解釈に関わる誤解や笑話の例を取り上げ、〈ウナギ文〉の意味を正しく理解するためには、文脈を正しく把握し、言語表現に現れていない関係を構築することが重要である、ということを再確認した。

第６章「周辺的な〈ウナギ文〉と〈ウナギ文〉の周辺」では、〈ウナギ文〉に似た意味的特徴を持つ表現においても、意味を解釈する際には関係構築が重要であることを示した。

終章では、全体のまとめと残された今後の課題について述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国語・日本語・英語の〈ウナギ文〉の統語的・意味的特性と文の意味解釈のメカニズムを豊富

な言語資料に基づいて分析したものである。

本論文は、本文６章と終章から構成されている。

第１章「〈ウナギ文〉の問題」では、まず中日英３言語に見られる〈ウナギ文〉を定義した上で、〈ウナギ文〉の一般的な特徴を述べている。

第２章「〈ウナギ文〉の統語的特徴」では、〈ウナギ文〉の統語的特徴について三つの節を設け、１節では中国語、２節では日本語、３節では英語の〈ウナギ文〉をそれぞれ考察している。

第３章「〈ウナギ文〉の意味的特徴」では、通例のコピュラ文と比較しながら、〈ウナギ文〉の意味的特徴が考察されている。

第４章「関係構築」は本論文の中心をなすものである。関係の構造体は、1）Ｃ（文脈）、2）Ａ（NP_1の指示対象）、3）Ｂ（NP_2の指示対象）、4）Ｔ（〈ウナギ文〉が現われる文脈における話題）、5）Ｘ（同じ話題にかかわる要素）、などの要素から構成される。文脈Ｃを簡略化して円で表現する場合には、関係の構造体は、円の内側に話題Ｔを中心にして構築される。ＡとＢの意味関係は、他の関係と共に関係の構造体の一部をなすと同時に、それによって支えられ、関係の構造体において前景化されている。〈ウナギ文〉の分析においては、話題という概念の重要性はすでによく知られているが、表現の理解に関わる要素間の関係構築という着想およびその構築のメカニズムは独創的であり、高い評価に値するものである。なかでも、重要な役割を担う要素であるＡとＢの意味関係が、関係の構造体において前景化される、という捉え方は有効であり、関係構築のメカニズムの妥当性を裏づけるものである。

第５章「〈ウナギ文〉の解釈」では、〈ウナギ文〉の解釈に関わる誤解や笑話の例を取り上げ、〈ウナギ文〉の意味を正しく理解するためには、文脈を正しく把握し、言語表現に現れていない関係を構築することが重要である、ということを再確認している。

第６章「周辺的な〈ウナギ文〉と〈ウナギ文〉の周辺」では、〈ウナギ文〉に似た意味的特徴を持つ表現においても、意味を解釈する際には関係構築が重要であることを示した。

終章では、本論文の内容を総括し、今後の研究課題と展望を述べている。

以上のように、本論文は、中日英〈ウナギ文〉の統語的・意味的特性と意味解釈のメカニズムを明らかにしようと試みたものである。３言語に見られる〈ウナギ文〉の使用頻度および使用条件の相違など、検討すべき課題は残されている。このような課題は残されているものの、〈ウナギ文〉の対象言語を日本語以外に中国語、英語にまで広げ、小説や映画のシナリオ等から数多くの言語事実を引用し分析しており、資料的価値という点からも本論文がもつ意義は大きい。同時に、豊富な言語資料に基づいた実証的な手法により、説得力をもつ結論が導き出されている点は高く評価できるものである。以上の所見により、本論文は、大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。